慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フェター原著河上肇評釈 物財の価値
Sub Title	
Author	高城, 仙次郎
Publisher	三田学会
Publication year	1911
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.5, No.4 (1911. 10) ,p.559(211)- 565(217)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19111020-0211

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

め一國の資本は一年中に何度も迅速に運轉せらる。然るに我國の如く小賣を信用取引とするときは資本の回轉の速度が大に遲緩とならざるを得ない。云ふ迄もなく我國は歐米に比して資本が少ないといふのは其實資本回轉の速度が鈍いと云ふことが大原因であるが、此速度を增加して資本を豐ならしめんとすれば是非共小賣取引を重に現金拂とせねばならぬ

（註、圏點は評者の附けたるものなり）

「資本」を分ちて貨幣と貨物との二となすことを得べし。世人が「資本」と云ふ時は或は貨幣を意味し或は貨物を意味す。著者も亦前掲拔萃中「資本」を二個の意義に用ゐられたるに非ずや。著者の所謂「資本」とは前後の關係より見て貨幣を指すものゝ如し。次に「資本」は貨物を意味するが如し。「資本」は兩者の何れに屬するや明ならず。

されば貨幣の流通高及び貨物の現在數量に異動なき限りは貨幣循環速度の增大は貨物運轉の速度を意味する故貨幣循環の增進は資本運轉を迅速になすと云ふことを得べし。然れども果して著者の論ずるが如く、小賣市場が重に現金取引となれば貨幣循環速度を增し得るや疑はし。假りに月收三十圓の人ありて一日に一圓宛の信用買をなし、晦日に月給を受取り支拂をせしとせよ。

然るに各個人の貨幣運轉の速度は或一定の期間に於ける支拂金額を同期間の所持金の平均額を以て除したる商なり。而して晦日一日の所持金三十圓の一ヶ月間の一日平均は一圓にして支拂總額は三十圓なるを以て此人の貨幣運轉速度は正に一ヶ月三十回なり。反之此人が若し朔日に三十圓の正金を有し一日に一圓宛の買物をなし正金を其都度支拂たりとせんか、支拂總額は依然前と同じく三十圓なるも、所持金の一ヶ月間の一日平均は十五圓五十錢なるを以て此場合

に於ける貨幣運轉速度は一ヶ月二に滿たず因是前者と後者との間に十五倍の相違あり。而して一國の貨幣循環速度は各個人の貨幣運轉速度の平均なれば、現金支拂の風習を有する國民の貨幣循環速度は遲鈍にして、信用制度の發達せる國の貨幣循環速度は敏活なり若し果して然らば、小賣市場が信用賣買を減縮して以て一國の貨幣循環速度を增し且つ之に由りて資本の運轉を迅速ならしむることを得るや。

著者の我國に於ける掛賣の弊害及び掛賣の原因に關する說は名論にして些の間然する所を見ず。評者も亦掛賣の弊害を除去するには現金拂の奬勵は其一策たるを信ずる者也。されど吾人は經濟學の原理と經濟策論とは混同すべきものに非ざるを信ずる也。

然りと雖も、評者は一介の學生にて猥りに著者の如き大家の名著に對し批評を加うるが如き不遜を敢てするものならんや。唯濟學の餘勢過つて稚兒の片言と變じたるのみ評者は著者の襟度が其蕪言を寬容して餘りあるものなるを信ずる也。

時正さに秋風徐ろに學窓を訪ひ、燈火親しむ可し。是れ讀書の好期、各好讀家は實業家、爲政家、學者、學生たるを問はず、等しく本書に接して著者の該博の知識と鋭敏の觀察力より得る所多からん。（高城）

フエター原著
河上肇評釋
物財の價値
大判百四十二頁　定價七十錢
四十四年八月有斐閣發行

本書の原著者は米國コーネル大學經濟學教授フランク・エー・フエター氏なり。氏は米國屈指の經濟學者にして且つ心理經濟學派の錚々たる新進の大家なり。本書は原名を

The Principles of Economics, with Applications to Practical Problems.

と稱し、千九百四年紐育市センチュリー會社の出版に係る米國有數の經濟原論の教科書なり。全編を三卷に分ち第一卷は物財を論じ、第二卷は人の勤勞の價値を說き第三卷は價値の社會的現象を討究す。

評釋者は此三卷の中第一卷の大意の評釋を試みたり。評釋は之を分ちて

上編　現在財（既熟享樂財）の價値
中編　使用財（持續財）の用途（賃料）
下編　使用財（持續財）の體價（元本）

となせど各編の原書に對する精粗は一ならず。然れども、原書中の最も緊要なる所は追句的に飜譯せられたり。註釋の最も多きは上編にして同編は本文の註釋より多きこと僅かに二三頁なり。中編及び下編は註釋を挾むこと上編の如く多からねど、中編第五章「富及び其用」なる一項は（六頁）註に據れば全く評釋者の挿入せられたるものなり。

此評釋書の原書は晦澁の語句多きを以て有名にして、コーネル大學生にして日々其著者フェター教授の講義を聽き居る者の難解の教科書となす位なるが、獨創の見解に富み純理經濟學史上に持擧すべき名著なることは夙に定評あり。然るに如何なる理由に因るや、餘り是迄フェター氏の學說は我國の經濟學々生に紹介せられざりしに、今回評釋者が其獨特の健筆を振つて是れが紹介の勞を取られたるは我學界の爲に大に賀すべき事也。純理經濟學に造詣する所深く、我經濟學界に貢獻する所多きことフェター氏の米國の經濟學界に於ける地位と同じき評釋者がフ氏の著書を我經濟學界に紹介せらるゝに至りしは强ち偶然の出來事に非ざるべし。殊に原書中の難句疑點を平易明瞭に省述釋解せられ就中原著者が自ら以て獨創の學說とせる心的所得に對する評釋者の解說は簡明を極めたり。此評釋に依りて英語を解する讀者は原書及び評釋を

併讀して益々原書の强點の發揮を感じ、英語を解せざるものは此評釋を原書の最上の解說として熟讀せば大に會得する所あらん。

然れども本書は前述の如く單純なる飜譯若しくは解說に非ずして、評釋者は本文に對する批評と本文を補正する目的を以て新に起草されたる評釋者獨創の議論とを所々に挿入せられたり。此等の批評と獨創の論說は概して謹聽すべきものなれども、間々吾人が多少解釋し能はざるものなきにしも非ざるの觀あり。例へば、中編第五章「富及び其用」に對して評說者は「本節は解說者の全く新に挿入する所にして、原著者が茲に斯かる議論を爲し居れるに非ず」と云はれたるを以て吾人は同節は全く評釋者の獨創の意見ならんと速斷して本文を讀下したるに、其中フェター氏の議論に酷似したる一二の條句に相遇したるを以て原書と對照し、評釋者の意見と原著者の議論と相一致せる所あるを發見したり例へば（三十九頁）

「今まで物の使用 uses の價値は之を賃料と云ひ人の役用 services の價値は之を勞賃と云ふ」

とあるが此は原書二百五頁の

While rent is the value of the uses of things, wages is the value of the services of men.

の解說の如く見へ、又續いて

「物の使用は往々にして物的役用 material services と稱せらる。物的役用は人的役用 human services に對するの語にして、共に『用』の一種に屬す。卽ち賃料は勞賃と等しく『用價』の一種たるものの也。」

とあるは原書二百五頁の

Material services and human services are merely specific kinds of the genus services (utilities).....wages bear the same relation

to man's services that rent does to the material uses of wealth.

に相似たり。吾人は此に至りて前註を再讀して茲になる語に心付き、此章は評釋者が自己の獨創の意見として挿入されたるものに非ず、且つ讀者が斯る誤解に陷ることを防ぐに注意せられたるを發見し、吾人は衷心より平素盲讀の惡習を有するを恥ぢ慚愧措く能はざるものありたり唯憾むらくは評釋者が前記挿入意見の出所を明記せられざりしことなり。

次に第十二章「利子及び利子決定の理法」（百十七頁―百二十二頁）に於て評釋者は原書の本文とは獨立に立論して曰く

「第一に賃料は物の持續的使用の對價にして、利子は價値の時差なり。」又曰く

「次に賃料は一定の財が繼續的に一定の用を發揮すてふ物的事情に其根據を有するに反し利子は時を異にせる同一の二個の財（又は財の用）が人に依りて價値の差を附せらるゝてふ心的事情に其の根據を有す。」

然れども賃料と利子の間に斯くの如く物的と心的の區別を立て得るや疑はし。著者は其說を立證せんが爲論じて曰く、「例へば茲に家屋ありとする時之に一定の賃料を發生する所以のものは、其家屋が人をして雨露を凌がしむるてふ一定の効用を繼續的に發揮するが爲にて、其繼續的効用の一ヶ月間の使用の對價をば五十圓と見積る時、其五十圓と云ふが卽ち家屋の一ヶ月分の賃料なり。然るに之と異り、千圓の一ヶ月分利子が五十圓なりと云ふは、現在に於ける千圓と一ヶ月後に於ける千圓とにては其の價値の差が五十圓なりと云ふ意味にて、此の場合には、其の千圓と云ふ貨幣が一ヶ月間を通じて繼續的に客觀的に存在を保ち居る事を必要とせざる也。卽ち家屋は一ヶ月間繼續的に且つ客觀的に存在すれども、千圓は繼續的に且つ客觀的に存

在せざる也」と果して然るや。抑も人が他人に金錢を貸與なすは返濟期に至りて債務者が之を皆濟し得ると信ずるを以て也。其貸金が殖產事業に投ぜらるゝも將又他の目的に使用さるゝとも返濟期に至りて負債者が其れを返濟すべき資力を有するを信ずる故也。されど資力は財貨を離れて存在することを得ず。故に債權者の方より見れば返濟期に至りて千圓の返金ある筈なるを以て、債權者に對しては千圓の貨幣が繼續的に且つ客觀的に存在し居る也。又債務者は返金の資力を宿し居る財貨を有し、返濟期に至りて之を現金に引換へ借財を返却することを得るを以て債務者に對しても亦千圓の貨幣若しくは之に相當する貨物が繼續的に且つ客觀的に存在し居ると看做すことを妨げず。論者或は云はん、債務者が千圓を浪費し終り返濟期に至りて何等返濟の資力を有せざる場合生ぜざると限らざるを奈何せんと。然り如斯場合なしとせず、然れどもこは少數の例外也。加之、此種の例外は貨物賃貸借にもあり。卽ち貨物賃借者が其貨物を破壞燒燼、賣却、質入、遺棄等を爲したる時是れなり。

次に著者は物價變動の際に於ける賃料と利子との相違を論ぜられたるが、這は動かす可らざる卓說にして、吾人の敬聽する所也。然るに著者は進んで論じて曰く

「賃銀と利子とは時の關係に於て異る。先づ之を賃料に就いて云へば、昨年と比較することなくして今年のみの賃料あり。昨日と比較することなくして今日のみの賃料あり而して之を論理上より云へば或る一瞬時に於ても賃料の成立を思量することを得。之に反し利子なるものは現在の千圓と一箇年後の千圓と比較して始めて在り、今日の千圓と明日の千圓と比較して始めて在り、而して之を論理上より云へば、一定の時間內に於いては利子なるも

のあれど或る一瞬時に於ける利子なるものは之を思量することを得ず」と

果して然るや。抑も一瞬間とは何を指すや。惟ふに一瞬間なる語に二個の異なれる意義あり一は極微の時間卽ち英語の a moment にして、一は數學及び物理學にて用ゐる或る時點 a point of time なり。前者は細微なりと雖も一個の持續時間を有し、後者は之を有せず。評釋者が或る一瞬時に於ても賃料の成立を思量することを得」と云はるゝ時は a moment を意味し、「或る一瞬時に於ける利子なるものは之を思量することを得ず」と云はるゝ時は a point of time を意味さるゝには非ずや。そは兎もあれ、論理上より云へば moment に對しては評釋者の主張せらるゝ通り賃料を思量し得ると同時に又利子をも思量し得らるべき筈也。吾人は金融市場に於ける日歩なるものを知れり。云ふ迄もなく日歩は一日以内の借財に對する利率を云ふ而して此一日以内の時間が一時間なりとも將又其れより少時間たりとも同じ日歩を支佛はるゝものたり。又或る時點に對しては利子を思量することを得ざること評釋の如くなると同時に賃料の成立をも想像し能はざる也如何んとなれば何人か如何なる貨物をも存在せざる持續時間に對して賃借せんや。又其貨物の所有者が存在せざる持續時間内に如何にして何等の便益を其貨物より享受することを得んや。或る貨物が或る時點に存在すと云ふことを得るも、其時點に於て或る一定の便益を其使用者に與へたりと云ふことを得ざる也。例へば此紹介文の執筆者が現に使用しつゝある萬年筆は明治四十四年九月三十日午後七時三十五分三十秒に存在せりと云ふことを得るも同年同月同日同時同分同秒に幾何の利益を與へたりとは云ひ難し。然れども、同時刻より同時三十五分三十一秒迄に卽ち一秒間に如何程の利益を與へたりと云ふこと得べし。否な同刻より同時三十五分三十一秒一萬分の一迄に卽ち一秒の一萬分の一の時間内に或る一定の利益を與へたりと云ふことを得べし。如何んとなれば存在と云ふことは持續時間の觀念を離れて想像することを得ざればなり。

以上は吾人の評釋書に對する二三の雜觀なるが、此等は勿論鼎の輕重を問ふに足らず。本書は一小冊子なりと雖も最近斯學の出版物中の白眉の一に數ふべく原著書は一好紹介者を我國に得たるを喜び、我經濟學界も名著の好解說を得たるを祝すべし。本書は二三ヶ月之に先ちて出版せられたる評釋者及び河田學士の共譯せしピールソン著價値論の好侶伴にして、此價値論を通讀したる者は是非共本書をも熟讀して、比較研究の資料とせられんことを切望して止まざる也。苟しくも和蘭のピールソンの著書に接したる者が米國のフェターの學說の門戸を衝かずして可ならんや。讀者一度び此評釋書を繙かば紙面に溢るゝ獨創力の餘勢底止する所を知らずして、諸著の思索力に一大刺戟を與ふるを感ずべし。吾人の妄言に至りては評釋者の高邁廣濶の性格之を一笑に附し終るならんと信じて疑はざるもの也

（高城）